

人間環境学部

フィールドスタディ報告書

その先の自分を創る。



フィールドスタディのすすめ

「フィールドスタディ」は、人間環境学部設立以来、続けられ拡充されてきたユニークで重要な学習プログラムです。そして人間環境学部のDNAの一部です。

「フィールドスタディ」は、キャンパスを出て、いろいろな自然環境や社会環境に遭遇し、現場の人々と出会うことによって、その場の状況を実感することを目的に設けられています。いわば、現場主義の学習プログラムです。

またこのプログラムはいわゆるPBL（Problem-based Learning）の考え方を取り入れたものとなっています。PBLとは現場の問題を素材としながら、具体的な問題の解決を図るために参加者自身が中心となって、グループあるいはチームで学習を行っていく方法を指しています。

われわれの「フィールドスタディ」の参加学生の学年は複数年に渡っており、多くのプログラムは1年のときから参加できます。そこでは短い期間ではありますが、異なる学年が「同じ釜の飯を食う」体験を通じて、みんなで打ち解けて楽しい時間を過ごすことができます。

しかし、「フィールドスタディ」はそれだけではありません。

皆さんがフィールドの現場に立つということはどういう意味をもっているのでしょうか。それは皆さんが訪れた現場が否応もなく、皆さんに何かを語りかけてくるということです。その場に立つ前には思いもよらなかったこと、なぜ？どうして？という疑問、そうだったんだ！という感覚……。本当に、さまざまなことが皆さんに押し寄せます。この体験が重要なのです。

そのためには、事前授業での学習も大切です。皆さんの事前の関心と自分へのインプットが現場での疑問や感覚の導火線となっているのです。その意味で、グループあるいはチームとして行われる「キャンパスでの学習」も「フィールドでの学習」に劣らず、大切に欠かせないものです。

事後授業も重要です。皆さんが「フィールドスタディ」で体感したものをみんなで議論することにより、それぞれの回想をグループあるいはチームとして定着させる役割をもっています。このような「フィールドスタディ」によって、新たな興味がわき、学習意欲を喚起するきっかけともなります。また問題を解決してゆくうえでチームワークの重要性にも気づかされることでしょう。

今、時代は大きく変化しています。ややもすれば、めまぐるしく変化する社会に翻弄され、自己を見失いがちになります。一方で、われわれがめざす社会は、人間と環境の調和・共生が求められる社会、すなわち持続可能な社会です。「フィールドスタディ」に主体的に参加することでそのような社会と一緒に考える契機としてみようではありませんか。



人間環境学部
学部長 國則 守生

フィールドスタディ案内

持続可能な社会の実現を目指す人間環境学部のカリキュラムは、政治、経済、法律、社会、科学、文化、歴史、思想など、さまざまな角度から人間社会と自然環境に関する理解を深め、環境問題を学際的に捉えることをとおして、なぜ、どのようにして環境問題が起こるのか、また、持続可能な社会の実現のために何をどのように実践していくべきかについて、学生がみずから学び、考えることを目指して設計されています。

その要にあるのがフィールドスタディです。自然保護、まちづくり、農村振興、地域福祉、国際協力、エネルギー問題などに関わる現場に身を置くことで、教室での学習だけでは気づきにくい問題を発見すること、また、講義科目での学習や日常生活での見聞をとおして漠然と抱いている問題意識を、具体的なかたちで実感することが、フィールドスタディの目的です。

そうして練りあげられた問題意識を、専門的な講義科目をとおして多面的に検討したり、各自の所属する研究会（ゼミナール）のなかで具体的な課題に落とし込んで探求していくことで、フィールドスタディの経験が生きてくるでしょう。



contents

国内フィールドスタディ

群馬県安中市 「障がい者福祉の体験」	朝比奈 茂／宮川 路子	5
長野県飯田市ほか 「環境と文化の都市・飯田のまちづくり、地域の伝統芸能と社会」	安藤 俊次／石神 隆	6
東京都、神奈川県 「陸・海・空の交通運輸を支える」	北川 徹哉	8
埼玉県三郷市 「地域のなかで障がい者と同じときを過ごす」	國則 守生	9
山梨県富士河口湖町、山梨県小菅村、横浜市 「持続可能な地域社会の多様性～観光リゾート、山村、大都市の地域間比較」	小島 聡／朝比奈 茂／梶 裕史	10
東京（官庁街、下町、山の手） 「東京いー散歩」	後藤 彌彦	12
北海道利尻礼文サロベツ国立公園 「国立公園の魅力を支える地域活動にふれる」	高田 雅之	14
新潟県上越市吉川区 「ブナの森から農業と農村を考える」	田中 勉	16
各地の科学博物館 「科学博物館で学ぶ」	谷本 勉	18
宮城県石巻市 「生業支援・学習支援から復興を考える」	西城戸 誠／辻 英史	19
青森県繭ヶ沢町、五所川原市 「再生可能エネルギー・自然保護と地域社会・まちづくり」	西城戸 誠／板橋 美也	20
宮城県石巻市北上町 「北上トレイル：石巻市北上町における生業を中心とした地域社会のレジリエンス形成」	西城戸 誠／辻 英史	21
静岡県浜松市、掛川市、湖西市 「浜松企業の DNA から企業経営の持続可能性と CSR を探る」	長谷川 直哉	22
福岡県北九州市 「環境修学旅行」	藤倉 良	23
青森県五所川原市、中泊町 「津軽鉄道が結ぶまちづくり」	西城戸 誠	24

海外フィールドスタディ

オランダ、ドイツ 「国際平和の追求—国際法の現場を知る—」	岡松 暁子／武貞 稔彦	25
オーストラリア 「オーストラリアン・フィールド・スタディ（AFS）：英語と自然環境保護を学ぶ」	長峰 登記夫／ストックウエル エスター／板橋 美也	26
カンボジア王国 「開発途上国の人々の暮らしと国際協力の現場を五感で知る—内戦の遺産と現代カンボジア社会—」	武貞 稔彦／安岡 宏和	28
南インド 「開発途上国における生物多様性保全の現場にふれる」	高田 雅之／武貞 稔彦	30

「障がい者福祉の体験」

担当教員名 朝比奈 茂／宮川 路子

1 コースの概要

日 程	2013年8月4日～31日
場 所	群馬県安中市 「ゆきわりそう」の山荘内にて
参加人数	8人

2 コースの目的

障がい者との合宿を通じて寝食および行動をともにすることで、人間としての生き方を実感する。また福祉活動における仕事内容、それに携わっている方々と意見交換をすることで、現在の福祉環境について理解を深める。

3 事前学習

NPO 法人「ゆきわりそう」より担当者をお招きし、本体である「ゆきわりそう」の組織や活動内容、また障がい者の身体的および精神的特徴について説明を受け理解を深めました。次に開講するプログラムの説明を受け、各自の興味や関心に沿って参加プログラムを決定しました。後日、「ゆきわりそう」のプログラム責任者と連絡をとり、各自練馬区にある施設に出向き、事前打ち合わせ（学習）を行いました。

4 行程（内容）

8月4～6日

・マラソン2

対象者：知的障がい児及び障がい者

8月7～9日

・ソフトスポーツ ・ゴロ野球1

対象者：知的障がい児及び障がい者、肢体不自由者

8月11～14日

・マラソン1 ・絵画

対象者：知的障がい者、肢体不自由者

8月15～17日

・ゴロ野球2 ・ソフトクリーム

対象者：知的障がい児及び障がい者、肢体不自由者

8月19～22日

・クレヨン ・遊び塾

対象者：知的障がい児及び障がい者

8月23～25日

・レッツ音楽

対象者：知的障がい者、肢体不自由者

8月23～26日

・和太鼓

対象者：知的障がい者、肢体不自由者

8月26～28日

・ハーフマラソン

対象者：知的障がい者

8月27～30日

・ジョギング

対象者：知的障がい者

8月29～31日

・ことばの教室

対象者：言葉に不自由を感じている方

5 事後学習

事前学習同様に「ゆきわりそう」から担当者をお呼びして事後学習会を開催しました。当日は、課題である「感想文」および「フィールドノート」を持参し、各自が行った活動を共有すること目的に行いました。ペアになって互いに体験した情報をインタビューし、1,000字程度にまとめ、相手の体験活動を発表しました。最後に担当者より全体の講評を行って頂き終了しました。

6 雑感

本フィールドスタディは、本年3月に退職した堀内行蔵教授より受け継いで行ったプログラムであり、学部創設以来、現在まで行われてきたロングラン・プログラムです。

人間の成長段階における最終章となる大学生。この時期に、普段接することの少ない、障がい者と寝食をともにすることは、人間を人間として理解することのできるプログラムであると感じています。物事がスピードを最優先として動いている今日において、そのような世界とは別に過ごしている障がい者の方々の生き方を学ぶことは、学生たちに新たな視点や感性を与えることとなるでしょう。

「環境と文化の都市・飯田のまちづくり、 地域の伝統芸能と社会」

担当教員名 安藤 俊次／石神 隆

1 コースの概要

日 程	2013年 8月2日～5日
場 所	長野県飯田市ほか
参加人数	45名

2 コースの目的

旧城下町である飯田市は、人口約10万人の自然豊かな地方都市です。ここでは人形劇とリンゴ並木を愛し、エコツーリズムを推進する南信州の環境文化都市として有名です。当フィールドスタディでは、人形劇フェスティバルへの参加を通し、また、環境重視のまちづくりをめざす飯田市の政策や活動を多方面から学ぶことにより、新しい地域のあり方を考えます。さらに伝統的な芸能を鑑賞、妻籠（つまご）および馬籠（まごめ）地域の伝統的町並みを視察することにより、文化の伝承と地域づくりを総合的体験的に学習していきます。

3 事前学習

飯田地域の自然、文化、社会、経済について、資料やスライドを用いたの学習やディスカッションをします。また、伝統芸能・人形浄瑠璃の背景や内容、鑑賞の仕方などを学びます。さらに、フェスティバル参加の予備練習も行います。

4 行程（内容）

1日目

朝 東京発(全行程 貸切バス) 諏訪インター経由
午後 飯田遠山郷(山間部)着 オリエンテーション
夕刻 山間部の自然(川・山)探索 各種学習イベント

2日目

午前 遠山郷にて民俗・文化探索(和田城址の里の山国生活文化を学習)
旧木沢小学校見学(校舎復活の取組みを学ぶ)
午後 飯田市中心部 飯田市の地方自治等に関する講義、まち歩き、人形劇フェスティバル見学
夜 りんごん祭り(町ぐるみ夜踊り)に踊り連として参加

3日目

午前 現地まちづくり学習(自治体経営ほか、天竜峡にて)
午後 伝統的芸能「人形浄瑠璃」の鑑賞(今田人形の館にて)
夕刻 まちづくり学習(インストラクターによる市内見学、中心市街地活性化の取組み)ほか

4日目

朝 飯田市中心部出発、伝統産業(水引工芸)見学
昼間 旧中仙道宿場町、妻籠宿および馬籠宿に移動
歴史的町並み保存地区の見学・現地学習
夕刻 東京着



りんごん踊りにて



まちづくり講義



米国人による人形浄瑠璃の鑑賞



米国人による伝統芸能

5 事後学習

各人が考えたテーマで作成したレポートに基づきそれぞれ発表し、飯田地域を多方面から理解します。その後、現地体験を通しての飯田地域の現在や将来についてディスカッションします。

6 雑感

飯田地域は地域史や伝統文化の宝庫で、汲めども尽きない興味深い地域で様々な学びの場があります。本フィールドスタディでは、フェスティバル期間中の「りんごん踊り」（約2万人が参加する市民行事）に、他参加大学と一緒に大学連として出場します。このような積極的な参加を通して、少しでも市民のアンクルからの地域をみる目を養っていきます。参加した一人ひとりが飯田ファンになり、地域というものへの愛着をばぐむ豊かな経験となって残っています。



伝統的街並み保存の見学



伝統工芸（水引）見学

学生の声

飯田市の町づくりに触れて

今回のフィールドスタディでは、飯田市の町づくりを中心に勉強しました。飯田市では町ぐるみでの活動が多く、その一つが今田人形浄瑠璃です。人形浄瑠璃を上演する人形劇場も市民の方々がお金を出し合って建設をしたり、浄瑠璃の運営や演技も全て市民の方々が行ったりと、市民一人一人の高い意識がないとできることではないと感じました。



1年 大古 千聖

今回飯田市へ行き、「市民主体のまち」であるのだと肌で感じることができました。市民の皆様の飯田市への思いを感じ、市民と行政が支えあい、のびのびと活動されており、理想のまちだと感じました。座学では知ることのできないことを知り、さらに貴重な体験をさせていただきました。これからの大学での勉強や将来に活かしていきたいです。

今回はお忙しい中、私たちのためにお時間を作っていただいた飯田市の方々に感謝いたします。

「陸・海・空の交通運輸を支える」

担当教員名 北川 徹哉

1 コースの概要

日 程	2013年9月2日～5日
場 所	東京都、神奈川県
参加人数	19名

2 コースの目的

人の生活、社会、経済の基盤である陸上、海上、空の交通運輸は常に正常かつ安全に運行することを強いられる上、近年は環境問題への対応も求められています。これらの交通運輸システムを支えるために、製造、維持管理、施設保守などの業務は極めて重要な役割を担っており、本コースの目的はそれらの現場を知ることです。

3 事前学習

自己紹介とグループ分けを行い、視察先と訪問スケジュールならびに注意事項を確認しました。また、グループごとに視察先についての事前調査を行い、予備知識を得ました。

4 行程 (内容)

航空機を健全な状態に保ち、人の命を守るメンテナンス業務の重責は計り知れません。ANA メンテナンスセンターは、航空各社の重要施設が建ちならぶ羽田空港の一画にあります。エレベーターを出るとそこは巨大なドックであり、すぐ外の滑走路を航空機が轟音とともに離発着しています。その日は2機の B787がドックに格納されていました。環境問題対応や燃料効率向上のため、機体の軽量化とサイズダウンが近年の流れであり、B787はそのフラッグシップです。重厚な整備用足場が機体を取り囲み、ジェットエンジンが分解整備されているなど迫力満点でした。整備士は自分専用の工具をもち、一つでも不足した場合は見つかるまで仕事を終えることができません。機体の内部に工具類を残してしまうと、甚大な事故につながるからです。また、参加者が特に関心をもったのは、航空関連業務の書類の多くが英語で書かれており、やはり英語ができる人材が採用されやすいことでした。

日産自動車株式会社・追浜工場は東京ドーム37個ぶんの広大な敷地を有し、性能テストコースや専用埠頭

などもあります。工場内では様々な音により会話が困難なため、無線ヘッドセットを使って説明していただきました。部品搬送ロボットが動き回り、数種のガソリンエンジン車だけでなく電気自動車“リーフ”も同一のラインで製造（混流ライン製造）されていたのは圧巻でした。なお、撮影等が一切禁じられているのは自動車業界の厳しい競争を物語っていました。

竹芝小型船ターミナルより“新東京丸”に乗船し、東京港の施設を海から案内していただきました。新東京丸は東京都港湾局が所有する視察船であり、世界各国の要人を案内するときにも使用されます。船内は立派な海上会議室であり、東京港の歴史や施設さらにはゴミ処理・埋立までも、わかりやすい解説により勉強することができました。我が国は海洋国家であり、海上物流とそれを支える港湾設備が高度に発達してきたことを改めて実感した、東京港一周の船旅でした。

5 事後学習

パワーポイントを用い、グループごとに視察内容ならびに企業研究の結果を発表し、このコースを取りまとめました。



ボーイング787のジェットエンジンの前で



竹芝小型船ターミナルにて新東京丸の前で

「地域のなかで障がい者と同じときを過ごす」

担当教員名 國則 守生

1 コースの概要

日 程	2013年8月5日～30日、9月21日の4日間 (ただし、8月13日～18日は施設側休暇)
場 所	埼玉県三郷市『みどりの風』『工房・風のうた』
参加人数	12人

2 コースの目的

このFSは知的障がい者が地域で生活するために行う作業や活動に参加し、障がい者とともに活動することによって地域での障がい者福祉活動を理解し、学生自身が何をできるのかについてフィールドの現場で考え実感してもらうことを目的に実施しています。人間環境学部でのいわゆる「人間形成」のためのFSの1つです。また学生自らが課題を発見し、現場でチームとして学習を行うという意味で1つのPBL (Problem-based Learning) と捉えています。

埼玉県三郷市の社会福祉法人で、障がい者が行う軽作業、昼食作り、パン製作、廃品回収、散歩、パン販売(市役所などの地域を訪問し販売すること)などに参加し、就労支援や生活介護などの実態を体験します。多くの参加学生は障がい者と活動をともにするのが初めてですが、4日間の実習を行うことにより、どのような課題などがあるのかに気づきます。当初このプログラムを立ち上げたときには知的障がい者の看護実習という名称で募集を行っていましたが、教えられるのは私たちの方であり、私たちが実際にできるのはまずは障がい者と一緒になって同じときを過ごすことだと参加者は感じ、今のプログラム名となっています。

3 事前学習

事前学習として、6月22日(土)に施設側の職員の方を交えてイントロダクションの授業を行いました。そこでは施設の紹介、活動内容の紹介、施設での注意事項などについての丁寧な説明を施設側から受けたのち、質疑応答が行われました。学生からは、どのような問題意識を持って参加するのかなどの発表がおこなわれました。また、パン製作希望者に対しては、O157を対象とした事前検査が求められました。

4 行程(内容)

施設側の活動は大きく分けて①生活介護(程度の差により2つの施設がある)、②就労活動(パン製作、厨房での食事提供、地域生活支援センターでの軽作業・内職活動)の2つの活動に大別されますが、5つの場所別活動に対して1日1場所のかたちで参加することが基本となっています。2013年度はとくに9月21日(土)に行われた「まつり」(施設側がそれまでに準備した食品・パン・クッキーなどを販売するとともに障がい者が地域住民と交流をもつ特別な行事)も対象に含め、準備段階を含めて多くの学生の参加を得ました。

1日の活動は、朝8時からの職員打ち合わせから午後3時までの介護・就労活動に参加した後、当日のフィールドノートのまとめを行い、担当職員からコメントをもらうことで終わるという日程でした。その後、職員の方との自由な意見交換も行われました。

5 事後学習

事後学習としては、10月26日(土)に施設側職員(6月と同じ方)の参加をえて、事後授業が行われました。最初に8・9月の実習の際作成されたフィールドノートをもとに、学生側から事後報告が行われました。実際に活動に参加しての感想や施設側へのコメントなどが発表されました。次に全般を見渡しての課題・思いつき・回想(reflections)を発表してもらいました。自分の身近にどのような障がい者施設があるのか、障がい者雇用のマクロ的な状況や障がい者総合支援法の役割や影響など、色々な関連事項についてそれぞれの学生がまとめた結果を発表し、施設の方を交えてコメントしあいました。「障がいのある人もない人も共に快適な社会環境」を築くことを考える機会として、卒業後の職場での役割や地域での社会貢献などの意識に繋げて議論を行いました。この結果は最後に報告書の形でとりまとめが行われました。



地域との「まつり」の様子



職員の方との交流

「持続可能な地域社会の多様性 ～観光リゾート、山村、大都市の地域間比較」

担当教員名 小島 聡／朝比奈 茂／梶 裕史

1 コースの概要

日 程	2013年8月19～21日、25日
場 所	山梨県富士河口湖町、山梨県小菅村、横浜市
参加人数	25名

2 コースの目的

「持続可能な地域社会」という理念は、全ての地域に共通していますが、望ましい将来の社会像、そのための具体的な課題や実践は多様です。そこで、対照的な3つの地域を探訪し、持続可能性の視点から比較します。

3 事前学習

事前学習の1回目は、世界文化遺産に登録される富士山、人口減少問題に直面する山梨県小菅村の現状と課題、横浜市における「農のあるまちづくり」政策の動向について講義を行いました。なお横浜市については、人間環境学部OBの職員をお招きしました。2回目は、参加学生が、3つの地域の多様な情報と質問すべき論点を持ち寄り、ワークショップ形式で共有を図りました。



世界文化遺産・構成資産を巡る

4 行程（内容）

1日目

8月19日は、まず富士河口湖町役場を訪問し、自治体政策の全般的な動向と世界文化遺産登録への対応について講義を受けた後、河口浅間神社、船津胎内樹型などの構成資産を見学しながら、現地説明を受けました。

2日目

8月20日は、土石流でかつて消滅した集落の復元テーマパークと西湖を訪れた後、小菅村に向かいました。小菅村では、まず山村の資源を活用したむらづくりについて、NPO 法人多摩源流こすげの説明を受けた後、村内の風景を散策しながら見学し、さらに企業と協力した森林再生の現場にも行きました。また夕方、村営温泉で入浴をして観光を体感し、夕食後は、若手の村民、小菅村で活動する若いNPO関係者と語り合う場を設けました。

3日目

8月21日は、村内施設の見学の後、ビレッジ・セールスのキャッチ・コピーを考えるワークショップを行いました。

4日目

8月25日は、みなとみらい地区で横浜市内の農家による朝市に参加し、市民への販売を手伝いながら、都市農業の担い手のみなさんと交流しました。昼食は、



世界文化遺産のまちを訪れて



ビレッジ・セールスのキャッチ・コピーを考える



横浜の地産地消の朝市で売り子体験

地産地消をコンセプトとする市内の飲食店で小松菜のランチ・コースを食べ、午後は、里地里山保全と体験型環境教育を実施している横浜舞岡公園を訪問し、担い手である NPO 法人やとひと未来の講義を受けた後、園内を見学しました。

5 事後学習

事後学習では、富士河口湖町への政策提案、3つの地域の比較に関するレポートについて、参加学生が報告し、担当教員を交えた討論を行いました。



朝市にて地元の野菜を販売しました。

6 雑感

対照的な3つの地域の持続可能性の相違について、学生たちは体感しながら学べたと思います。

学生の声

『知らないこと』を知る体験



1年 佐藤 舞

私がこのフィールドスタディに参加した理由はテーマである「観光と地域の持続可能性」に興味があったことと、人間環境学部だから出来ることをしてみたいという思いがあったからです。先輩方に囲まれての事前学習は周りの知識の深さなどから、こんな未熟な自分が訪問先で意見を言ったりするのは失礼ではないかと不安を感じましたが「自分にも何かできるはずだ」という思いを胸に知識がないからこそ多くのことを学ぼうという意識で当日を迎えました。

2泊3日+1日で3か所を回るハードスケジュールでしたが、そこで学んだ「自分の未熟さ」と「新しい発見」はフィールドスタディだからこそ知ることが出来たものでした。自分がどれだけ狭い世界で生きてきたのか、自分の知識や認識がどれだけつたないものだったかを思い知り、たった4日間でここまで新しいことを知るという経験も普通に大学生活を過ごしているだけでは経験できないものです。

「自分はまだ何も『知らない!』」ということを知る貴重な4日間を来年度からのゼミでどう生かしていけるかこれからの自分が楽しみです。

「東京いー散歩」

担当教員名 後藤 彌彦

1 コースの概要

日 程	2013年9月
場 所	東京の官庁街、下町、山の手を歩く
参加人数	13人

2 コースの目的

現在の東京は、徳川家康の江戸の街作り、明暦の大火後の川向こうへの拡大、明治の地区改正、大正の関東大震災、戦後の焼け野原からの復興を経て形作られました。これらを念頭において、このコースでは東京の街歩きを通じて、江戸と東京の歴史的遺産及び文化的遺産、環境に関する資料館、都市の緑、都市公園施設等を訪ねます。そして、東京の成り立ちと都市造りに際して環境と防災の視点が重要であることを学習するとともに、今後の都市環境、都市景観、都市の緑を考えることが目的です。

3 事前学習

プリント資料とビデオにより、東京の現在の都市形成の歩みを学びました。ビデオは「上野寛永寺」、「明暦大火と回向院」、「震災復興」、「ヒートアイランド」に関するものです。事前の予習に必要な参考書が紹介されます。

4 行程 (内容)

1日目

地下鉄虎ノ門駅に集合し、昭和初期の官庁計画による旧文部省ビルで旧大臣室などを見学し、桜田門を遠望したのち、明治の官庁集中計画による旧法務省庁舎（重文）の中の法務資料展示室を見学しました。農林水産省食堂で昼食の後、日比谷公園で日比谷図書館（千代田にみる都市の形成と展開に関する展示を学ぶ。）、日比谷公会堂などを見ながら日本初の西洋式公園を散策しました。



地震の科学館にて地震体験



旧文部省ビルにて旧文部大臣室を見学



旧岩崎庭園にて

2日目

清澄白河駅に集合し、深川江戸資料館で江戸の暮らしを学んだ後、清澄庭園を訪ね、大名屋敷から富豪の邸宅を経て、現在は都市の緑の拠点となる歴史を学びました。パン工場での昼食の後、隅田川に沿って散策、気象緩和など都市における川の働きを考えながら、清洲橋などの景観を楽しみました。終わりに明暦の大火に関する回向院を訪ねました。

3日目

JR 上野駅に集合し、上野公園から不忍池へ経て、旧岩崎庭園でコンドル設計の明治時代の洋館建築を見学しました。東大構内を散策し、昭和初期の校舎建築をみるとともに昼食をとりました。菊坂で一葉の足跡を訪ね、水道歴史館で江戸から現在にいたる水道を学び、終わりに震災小公園元町公園を訪ねました。

4日目

JR 王子駅に集合し、音無親水公園を経て飛鳥山公園を歩き、渋沢栄一の屋敷跡を訪ねました。地震の科学館で震度7などを体験し、旧古河庭園で和洋の調和した庭園を散策しました。昼食の後、西ヶ原ふれあい公園（東京外国語大学跡地）で防災と環境を考慮した最新の都市公園を散策しました。本妙寺や慈眼寺を経て、終わりに旧中山道のあるき、とげ抜き地藏を訪ねました。

5 事後学習

震災に対する後藤新平の働きに関するビデオでおさらいをしながら、FS に印象について意見交換しました。

学生の声

街歩きだからこそ見つけられた東京



2年 清水 力也

インターネットの普及などで知りたい情報をなんの造作もなく知ることのできる時代に私たちは生きている。しかし、自分の脚で実際にその場所を訪ね、自分の眼で実際に実物を目の当たりにすることがパソコンやスマートフォンなどから得た情報よりも数段価値のあることだとこのフィールドスタディ（FS）を通じて実感した。間接的な情報からは湧き起こらない疑問や関心がどんどん出てくるのに自分でも驚いた。

このFSでは、とにかく歩く。旧文部省庁舎や旧岩崎邸庭園、東京大学構内など4日間で十数か所を訪ねた。道中で上野大仏や芥川龍之介の墓など興味深いものにたくさん出会うことが出来た。このFSの魅力は、ひとつのテーマに制限されない都市環境や歴史的な文化財、都市景観など様々なテーマを参加者に提示し、考察する機会を与えてくれることだ。私は、西ヶ原みんなの公園という防災公園を訪ねた経験から地域の防災に関心を持ち、それを最終レポートにまとめた。

「国立公園の魅力を支える地域活動にふれる」

担当教員名 高田 雅之

1 コースの概要

日 程	2013年9月1日～5日
場 所	北海道 利尻礼文サロベツ国立公園
参加人数	25人

2 コースの目的

利尻礼文サロベツ国立公園の優れた自然にふれながら、国立公園の管理、NPO 活動、博物館活動、農業と地場産業など、自然環境の保全や産業振興との共生に取り組む人々の活動現場を訪ね、学習と対話をとおして自然の魅力を支える地域社会と地域活動の在り方について考えることを目的とします。サロベツ湿原では国立公園の管理と自然再生、農業との共生について、また利尻島では外来種問題、観光との関わり、生き物の調査活動などについて、現場と人から学びます。

3 事前学習

以下の5つのテーマに分かれて現状と課題を調べ、発表するとともに、全員で問題意識を共有しました。現場から多くのことを学べるよう、調べる中で湧いてきた疑問をできるだけ抱えていくことを心がけました。

- 1) サロベツ湿原の自然と再生
- 2) サロベツの農業と観光
- 3) 利尻島の自然と観光利用



環境省自然保護管から国立公園管理の講話

- 4) 自然を守る地域活動
- 5) 国立公園の管理と課題

4 行程 (内容)

1日目

午後に稚内市に全員が集めたのち、北海道遺産となっている北防波堤ドーム、漁業の歴史を留める旧瀬戸邸など、国立公園のゲートシティ稚内市を散策しました。

2日目

ノシャップ岬にある寒流水族館で北の海に生きる生き物たちと対面したのち、サロベツ湿原へ向かいました。途中幸運にもタンチョウの番いに遭遇。湿原センターで環境省自然保護管から国立公園の自然と保全の取り組みについて学んだのち、湿原の自然再生の現場を見学しました。夜は宿で湿原の保全に取り組むNPOの人からサロベツの豊かな自然と抱える課題について学びました。

3日目

昨日に引き続いて湿原センターを拠点に活動するNPOの人から地域におけるNPO活動などについて学び、木道を散策して直に湿原にふれました。次いで地域の主要産業である酪農について、豊富牛乳公社の工場と酪農家を訪ね、自然と農業との調和について考えました。その後サロベツを離れ、稚内からフェリーで利尻島へ、船からは異国サハリンが遠くに眺められました。夕食後は自然環境の保全に取り組む環境省アク



木道からサロベツ湿原を観察する

ティブレンジャー、博物館学芸員など3人から、利尻の自然を守る活動や生き物を調べる意義などについて講話を受け、夜遅くまで議論は続きました。

4日目

利尻の自然に直接触れながら、登山道の利用による浸食問題、種富湿原と南浜湿原における外来種問題など、人間が自然に及ぼす影響とそれを減らす活動について現場で学習しました。また博物館では生き物の標本の大切さについても学びました。その後外来種のオオハongoソウの除去に挑戦し、意外に重労働であることを実体験しました。そして夕食後は昨日に引き続き座学にて、自然ガイドと、登山道補修に取り組む人から、観光利用と自然への影響との関係について学んだのち、地域の視点から昨夜にも増して熱のこもった意見交換を行いました。

5日目

利尻島に別れを告げ、稚内フェリーターミナルで解散し、それぞれ帰途につきました。

5 事後学習

事前学習で調べたそれぞれの5つのテーマについて、現地で実際の自然に触れ、地域で活動する人々から直接話を聞き、意見交換した結果をもとに、新たな知識・理解・発見を盛り込んでグループ成果を取りまとめ、発表を行いました。そして各人がこの旅で何を、何を感じ、自分自身に成果をどう還元していきたいかについて振り返り、フィールドスタディを総括したレポートを提出してもらいました。

各自のレポートからは現場に触れずには決して得られない印象と考察が感じとられ、雄大で時に厳しい自



山本牧場で酪農の現場を見学



利尻岳の名水付近で観光客による登山道の浸食問題を視察

然をベースに地域で創造的に活動する人々が学生達に手渡した体験の大きさを実感します。国立公園を日々支え続ける地域の人々の姿をとおして、優れた自然を保全することの大切さを改めて実感できたのではないのでしょうか。

学生の声

「北海道フィールドスタディ (FS) 体験記」



3年 野中 勇輔

私は、ゼミで学んだ外来種問題や国立公園の資源管理のあり方を学びたいと思い、北海道 FS に参加しました。FS では机上の勉強では感じることができなかった問題に対する「危機感」を感じることができました。それは現場の有識者の方から直接話を聞き、自らの目で現場を見たからこそ、得ることができたものでした。事前学習で問題の所在を知り、現地で問題の本質を知る。本質を知ると関連する他の問題にも気づく。FS を通して多くのことを学ぶことができました。

また、多くの方のお話を聞くなかで自分の将来についての考えが今までとは少し変わったように思います。自分が、将来どのような人生を送りたいのか。どのような場所で生きていきたいのか。東京でビジネスマンとして働くイメージしか頭になかった私に、首都圏の暮らしとは異なる生活・仕事をする方々の話は確実に新たな価値観を与えてくれました。勉強の観点でも、それ以外の観点でも新たな発見に出会うことができる FS でした。

「ブナの森から農業と農村を考える」

担当教員名 田中 勉

1 コースの概要

日 程	2014年8月18日（日）～21日
場 所	新潟県上越市吉川区（旧 吉川町）
参加人数	19名

2 コースの目的

このFSの目的は、農業と農村についてよく見て考えることです。農業は自然環境を利用して成り立つ産業であると同時に、天候など人間の力ではいかんともし難い条件に左右される側面もあります。自然環境に大きく制約されながら、自然の恵みを受けて食糧を生産しています。

日本の農業は衰退が指摘されて久しく、農村は過疎と高齢化そして後継者難に苦しんでいると言われていいます。それは本当だろうか？ 自分の目で確かめてみよう。徹底的に見る・聞く・考えることをめざします。

3 事前学習

現地では何を見るか・何を尋ねるか、を明確にするための準備として①日本の農業の現状、②吉川区の概要、③食料・農業・農村基本法、④中山間地域等直接支払制度ほかの交付金制度、⑤農業法人による集落営農、などについて文献・資料を用いて学びました。また、「質問したいこと・知りたいこと」の項目づくりグループワークを行い、文書化して事前に現地関係者に送りました。

4 行程（内容）

1日目

昼までに現地の宿泊施設に集合、東京から3時間半程度で到着します。昼食後に「開講式・オリエンテーション」からスタート。まず、吉川区と農業の現況について市職員から説明を受け、「上越市の農業政策」に関する講義で考えるべき課題の提示を受け、その後、吉川の自然と農業をコンパクトに示す「田んぼの学校」（水辺のビオトープ）を見学します。ブナ林の中を歩き、そこから流れ出る水をためる溜め池、水路にはカワニナもいます。ビオトープではタガメやメダカなども観察できます。夜は、満天の星空の下で花火に

興じました。

2日目

この日のテーマは「水の流れをたどる旅」。マイクロバスで区内を山から日本海まで移動しました。元の人々に親しみをこめて「尾神さん」と呼ばれる尾神岳のブナの森を抜けて吉川の流れに沿って下り、途中、田んぼへ水を引くための「堰」や「用水路」を見学し、用水利用と集落形成の結びつきや集落間の関係について学びました。

午後は、「溜池」と、その水を利用するための施設である「ファームポンド」や「揚水機場」を見学し、川から取水が困難な地形にある田んぼの水確保の技術と仕組みについて説明を受けました。今回は、参加者からの要望に応じて日本海の浜辺まで足を伸ばし、夏の太陽と青空、雄大な海を満喫しました。

帰途、ブナの森の湧水に立ち寄り、冷たくおいしい湧き水でのどを潤しました。

宿舎に戻り、夕食は地元関係者との交流会です。期間中お世話になる方々とパーベキューを楽しみながら多くのことをお聞きする機会となりました。

3日目

「集落営農と棚田での米づくり」がテーマです。午前中は、平場（ひらば）の大規模圃場で集落営農を行っている「竹直生産組合」を訪問、集落単位で農業を行う背景・現状・今後の展望について説明を受けました。また、「田んぼのベンツ」と呼ばれる大型農業機械などの見学も行いました。その後、JAが運営する米の貯蔵施設「カントリエレベーター」を訪ね、収穫から出荷までのプロセスを学びました。

午後は、区内の酒蔵「杜氏の郷」を訪問、酒づくりの工程について設備を見ながら学んだ後、「東田中生産組合」を訪ね、小規模な集落営農の現状を学び、農機



上越市の農業政策について、真剣に講義を聴く



堰の見学



農家の方と語らう

具の見学もしました。

その後、山間部にある川谷地区へ移動する予定でしたが、豪雨のため山間部の道路が通行止めになったため宿舎に戻り、訪ねて来てくださった農家の方々と囲んで「棚田の農業」について話しをうかがい、参加者からのさまざまな質問に答えていただきました。棚田の見学と楽しみにしていたダイコンの種まき体験は中止となり残念でしたが、条件不利地域と言われる山間地農業の現実をじっくりうかがうことができ、理解を深めることができました。自然に左右される農業の一端を垣間見た感じがした午後でした。

4日目

午前中、山間地集落の現状と課題について、市の「集落づくり推進員」のかたに講義していただいた後、FS期間中の各所での見学を通して疑問に思ったこと、尋ねてみたいことについての「まとめの質問会」でプログラムを終了、昼食後に解散、帰途につきました。

5 事後学習

秋学期開始時に事後学習会を開き、参加者各自が吉



日本海の海辺にて

川で考えたことを発表し合い、まとめの学習を行いました。また、各自の課題に関するレポートを提出しました。

6 雑感

「行くときに見た田んぼが帰りには違って見えた」という参加者の感想がこのFSの全てを物語っています。

学生の声

吉川の農業と自然環境



3年 大熊 陽人

私が吉川フィールドスタディに参加して特に印象的だったことは、平場・中山間地といった農地の条件によって用いる技術が大きく異なるということでした。これまでは作物によって農作業の方法が異なるということだけしか考えていなかったもので、土地条件という視点について初めて気づかされました。

また、田んぼに用いる農業用水の取り扱いに関することからは、ここでしか学ぶことが出来なかったことだと思いました。「米づくりには水が大切だ」、これは何度も聞かされた言葉です。川沿いには「堰」、山間の傾斜地や水源から離れたところでは「溜め池」と、大切な水を余すことなく有効に利用する仕組みがきちんと整えられていることを知り、米作りに取り組む農家の人々の思いを感じることができました。

「水の整備」だけでなく、農業を行っていく上でのさまざまな環境整備は多くの手間や時間がかかることについて実際に現地を見て学べたことも大きな収穫でした。そして、そのようなお忙しい中、私たちに貴重なお話しをしてくださった関係者の方々への感謝は尽きません。

「科学博物館で学ぶ」

担当教員名 谷本 勉

1 コースの概要

日 程	2013年8月～2013年10月
場 所	各地の科学博物館
参加人数	10人

2 コースの目的

「科学博物館で学ぶ」は、グループ学習ではなく、あくまで原則個人参加のコースであり、各自がそれぞれの博物館でどのような企画・セミナーが計画されているかを調べ、参加するイベントを決定し、大学外の現場（フィールド）で環境問題等を学習することを目的とします。

3 事前学習

担当教員の研究室において数人ごとに事前学習会を開き、コースの目的を周知し、具体的な参加事例の検討を行い、学習計画、実行に向けての必要事項の確認を行いました。

4 行程（内容）

1つのテーマが4時間以上のものを1日分の学習として認め、それ以下のものを半日分として、合計4日分の学習をすることを義務づけています。

たとえば Y さんの場合は以下のような日程で行われました。

8月16日「国立科学博物館」

学習テーマ：夜の天体観望公開

学習の目的：普段、月しか見ることができず、その他の天体の位置や特徴をあまり理解していないので、実際に見ることで理解できるようにしました。

8月24日「千葉県立中央博物館」

学習テーマ：むしの声ーキリギリスとコオロギー

学習の目的：夜に活発に活動する虫の鳴き声を聞きながら、虫の生態、それぞれの特徴について勉強しました。

9月14日「千葉県立中央博物館」

学習テーマ：水槽栽培の水生植物を触って比べよう

学習の目的：埋土種子から発芽させて水槽栽培している多様な水生植物を直に触って比べながら学習しまし

た。

10月12日「国立科学博物館筑波実験植物園」

学習テーマ：植物園で秋のきのこを観察しよう

学習の目的：植物園で秋のきのこを観察し、それぞれのきのこの生態系やとくちょうについて勉強しました。

10月19日「国立科学博物館」

学習テーマ：アザミの王国、日本列島

学習の目的：4人のアザミの研究者から、それぞれのアザミの研究について学ぶ。そして、アザミの知識を深めました。

10月26日「日本科学未来館」

学習テーマ：DNAの抽出

学習の目的：ニワトリの肝臓からDNAを抽出して、観察しながらDNAの構造について学びました。

5 事後学習

参加するすべてのイベントについて、事前の計画書の提出と事後の報告書の提出を義務づけています。これらのやり取りを通して学習の効果を高めています。

6 雑感

参加するイベントを決定するまでが大変で、この段階で参加希望者の半分近くが挫折します。参加人数10人はその結果であり、やり遂げる人はさらに減ることになります。個人参加の自由にはそれなりの大変さが伴うということです。



千葉県立中央博物館で管理している水生植物を特別に採取、観察しました。

「生業支援・学習支援から復興を考える」

担当教員名 西城戸 誠／辻 英史

1 コースの概要

日 程	2003年8月5～9日、19～23日
場 所	宮城県石巻市
参加人数	各4名（計8名）

2 コースの目的

メディアなどで伝えられる2011.3.11の東日本大震災被災地のありようを見て、何とかしなければならぬ、何か助けになることをしたいと考え、個人的に被災地でのボランティアを経験した方もいるかと思えます。

法政大学人間環境学部では、宮城県石巻市において、NPO 法人 PARCIC と提携し、2011年から生業支援・学習支援を中心とした震災ボランティアをおこなっています。今年も、PARCIC の活動を通じて震災支援のあり方を実践的に学ぶ機会を設けました。

3 事前学習

事前学習のゲスト講師として、このフィールドスタディの受け入れ組織である、NPO 法人パルシックの西村陽子さんにお越しいただき、石巻市北上町の概況や、震災支援の現状と課題について講義をしていただきました。このフィールドスタディの参加者の定員は各4名と少数ですが、これは現地に適当な宿泊施設がなく、これ以上の規模ではボランティアの受け入れが困難であるためです。また、必要とされるボランティアの内容も、状況によって変化するため、現地での活動は臨機応変に行う必要があることを参加者は確認しました。また、石巻市北上町で地域の生業に関する調査研究を行っている、長崎大学の黒田暁先生の講義を聞き、現地の状況への理解を深めました。

また、文献講読として、震災前の北上川河口の生業と半栽培、震災後の東北地方の漁業のあり方や、震災後の漁業者の海に対するまなざし、さらに仮設住宅の状況と支援といったテーマについて、阪神淡路大震災におけるボランティアに関する論文などを講読しました。

4 行程（内容）

8月5日～9日、19日～23日の2回、各4泊5日で実施しました。石巻に到着後、市街地の見学を行い、北上町に向かいます。北上町では、生業支援として、パルシックが実施している仮設住宅団地（にっこりサンパーク）近くの畑で作物の収穫や団地内での販売の手伝いを行いました。また、十三浜大指地区で漁業の協業化を行っている「鵜の助」(<http://unosuke.jp/>)で、漁業の手伝いをおこないました。また、学習支援としては、仮設住宅の集会議場で子どもたちへの学習支援活動も行いました。

このような、地域の生業や学習支援を通じて、被災地における人々の暮らしを間近に体験し、「復興とは何か」という点、また震災ボランティアの社会的な位置づけや、ボランティアをする／されることの意味と意義などを考えることになりました。なお、フィールドスタディの最終日には担当教員が現地を訪問し、ふりかえりの現地学習を実施しています。

5 事後学習

事後学習会では2つの日程それぞれの活動報告を行い、内容の確認を行いました。また、各自がテーマを設定し、レポートを作成しました。人間環境学部のホームページに掲載されています。

また、法政大学大学院まちづくり都市セミナーにおいて、パネル報告として、学生が地域社会に関わる実践例の紹介を行いました。



「鵜の助」にて土嚢袋作りの手伝いを行いました。

「再生可能エネルギー・自然保護と地域社会・まちづくり」

担当教員名 西城戸 誠／板橋 美也

1 コースの概要

日 程	2013年9月2日～6日
場 所	青森県鱒ヶ沢町、五所川原市
参加人数	21名

2 コースの目的

青森県鱒ヶ沢町において、一般市民が風力発電事業に出資を行った「市民風車」や、リンゴ農家から廃棄物として出される「剪定枝」から作られた薪や木質チップが町内の福祉施設のボイラーの燃料や畑作の肥料として再利用される様子などを見学することで、再生可能エネルギーの地域社会への普及について学びます。また、白神山地（ミニ白神）を訪れて人々の生業と白神山地との関係を学ぶ一方、鱒ヶ沢町内での様々な地域活動（グリーンツーリズム、かかしによる地域活性化）やそれを支援するNPOへの理解を深め、再生可能エネルギー・自然保護と地域社会の再生がどのように連関しているのか、していくべきかを考えます。

3 事前学習

鱒ヶ沢町の再生可能エネルギーに関しては『フィールドから考える地域環境』（ミネルヴァ書房、2012年）、『環境の社会学』（新曜社、2009年）、白神山地については、『自然保護を問いなおす』（ちくま新書、1996年）などを購読しました。

4 行程（内容）

1日目

青森市から鱒ヶ沢町に入り、まず、白神山地の世界遺産登録と時を同じくして発足したミネラルウォーターの会社を訪問し、白神山地の水の商品化と流通についてと、売り上げの一部によって運営されているNPO法人の活動について話を伺いました。次に、リンゴの剪定枝を使った木質チップ工場を見学し、リンゴ農家で農作業体験をしながら、この地域の農業と再生可能エネルギーの循環の現状と課題、可能性について学びました。

2日目

午前中に鱒ヶ沢町役場を訪問して町の概要のレクチャーを受け、過疎地域の現状と課せられた課題と、

「わさお」（ブサカワで有名な秋田犬）のプロデュースを手がける方のお話を伺いました。昼食は農家民宿で鱒ヶ沢の家庭の味をいただき、午後は、中村地区のまちおこし団体の皆さんと、地域活動として展開されているかかしづくりを行いました。

3日目

3日目は、午前中に白神山地（ミニ白神）を訪問し、白神山地の自然に触れながら、世界遺産・白神山地と地域住民の生活との関わりについて学びました。そして、白神山地を源流とする赤石川の鮎を昼食にした後、市民風車「わんず」に訪問、見学し、レクチャーを受けました。風力発電、太陽光発電、チップボイラーを有する、町内の特別養護老人ホームを見学し、地域でエネルギーを生産し、消費している現場の実態と今後の課題を学びました。夜はこの3日間でお世話になった方々との交流会を行いました。

4日目～5日目

鱒ヶ沢町から青森市へ向かう途中に、津軽金山焼での陶芸体験をし、津軽鉄道サポーターズクラブの方の話を伺いました。午後からはオプションツアーとして、五所川原市内の街歩き、梵珠北斗七星伝説のレクチャーを受けました。翌日、梵珠山の登山を行い、梵珠北斗七星伝説によるまちづくりの可能性を探りました。

5 事後学習

写真を通じてフィールドスタディの振り返りを行い、テーマに関する理解を深めました。さまざまな人、活動が単体で見ると断片的に見えますが、再生可能エネルギー、自然保護、地域活動が、さまざまな形で関連し、それが有機的に結ばれるときにーそれは簡単なことではありませんがー、過疎地域の再生の可能性が見えてくることを確認しました。



市民風車「わんず」で説明や質疑応答

「北上トレイル：石巻市北上町における生業を中心とした地域社会のレジリエンス形成」

担当教員名 西城戸 誠／辻 英史

1 コースの概要

日 程	2013年9月9日～12日
場 所	宮城県石巻市北上町
参加人数	14名

2 コースの目的

宮城県石巻市北上町は、東日本大震災による津波の被害を受けた地域である。この北上町にて、地域の生業（農業、漁業）とその復興の状況について学び、地域社会のレジリエンス（回復力）と、震災復興の現状、そのあり方を学ぶことを目的としています。

3 事前学習

事前学習のゲスト講師として、石巻市北上町で地域の生業に関する調査研究を行っている、長崎大学の黒田暁先生の講義を聞き、現地への理解を深めました。

文献講読については、震災前の北上川河口の生業と半栽培について、震災後の東北地方の漁業や、震災後の漁業者の海に対するまなざしについて、仮設住宅の状況と支援について、阪神淡路大震災におけるボランティアに関する論文などを講読しました。

4 行程（内容）

1日目

石巻駅に集合後、駅周辺の石巻復興マルシェ、同市出身の漫画家石ノ森章太郎の作品を展示する石ノ森萬画館を訪問し、日和山に行きました。日和山から石巻市街地の様子を確認し、北上復興応援隊の木村綾子さんから東日本大震災時の話を伺いながら、北上町に向かいました。多数の被害者が発生した大川小学校への



We are one 北上の前で地域の方とバーベキュー



農地の津波被害と復興について伺う



「北上の魅力」についてのプレゼンテーション 十三浜小泊で漁業の説明を受けるセンター

献花、吉浜小学校跡地を見学した後、最大の仮設住宅であるにっこりサンパークに行き、自治会長の方の話を伺いました。

2日目

石巻市北上総合支所を訪問し、役場の方から北上町における被災状況および現在の復興状況について説明を受けました。次に、震災でも落ちなかった大きな岩がある釣石神社を訪問、震災時の話を伺った後、草むしりのボランティアをしました。午後は、十三浜漁業組合長の佐藤清吾さんから漁業の復興について、その後、橋浦地区で農業を行っている大内産業の方から「復勝米」の話を伺いました。田んぼの草刈りも体験しました。夜は、宿泊先の追分温泉のご主人から、北上町の観光に関する現状と課題についてお話を伺いました。

3日目

震災以降、漁業の協業化を行っている「浜十三」を訪問し、ワカメ・昆布漁で用いるロープの清掃作業などの手伝いをしました。昼食は、十三浜でとれた新鮮な海産物をいただき、漁師の方々からお話を伺いました。午後は、最終日の発表会のための準備を行い、夕方は、仮設住宅（にっこりサンパーク）近くの We are one 北上という販売所の前で、フィールドスタディ関係者を集めたバーベキューを行いました。

4日目

最終日は、3つの班に分かれ、「北上町の魅力」についてのプレゼンテーションを行いました。復興応援隊の方、追分温泉のご主人に講評をいただきました。

5 事後学習

事後学習では、各自が作成したレポートを提出し、フィールドスタディの内容を話し合いました。また、一部の学生は法政大学大学院まちづくり都市セミナーにて、パネル報告として、学生が地域社会に関わる実践例の紹介を行いました。

「浜松企業の DNA から企業経営の持続可能性と CSR を探る」

担当教員名 長谷川 直哉

1 コースの概要

日 程	2013年8月7日～10日
場 所	静岡県浜松市、掛川市、湖西市
参加人数	25名

2 コースの目的

日本経済の発展に貢献した、トヨタ、ホンダ、スズキなど多くの企業の発祥の地である静岡県浜松市。この地には今も多くの企業が本社や拠点を置いています。それは何故でしょうか。このフィールドスタディでは、静岡県浜松市に本社または製造拠点を置いている企業を訪問・見学することで、この地に根付く企業の持続可能性に関する秘訣を探るとともに、地方に拠点を置く企業の経営実態を知ることを目指します。事前に訪問する企業の CSR 報告書を読むことで、訪問先企業の理念や CSR に対する理解も深めます。

3 事前学習

事前学習では、浜松地域の社会経済史、訪問企業の創業時からの歴史など地域的特性と企業活動の関係についてレクチャーを行いました。全ての経営主体は、一定の歴史的・社会的要因によって生み出されたものであり、歴史的・社会的環境と無関係な存在では決してないということ、CSR を歴史的な視点から捉える事の重要性を確認しました。

4 行程 (内容)

1 日目

午前中、東京から掛川市に移動し、午後は大日本報徳社で宮川専務理事から報徳思想の歴史と現代社会での意義についてのレクチャーを受講しました。報徳思想は二宮尊徳が提唱した思想ですが、尊徳最後の弟子であり、掛川市で大日本報徳社第二代社長として活躍した岡田良一郎の思想は浜松発祥の多くの企業家に影響を与え、現代の CSR やソーシャルビジネス源流を見出すことができます。レクチャー受講後は浜松へ移動しました。

2 日目

午前中、浜松市内のスズキ (株) 本社工場を訪問しました。同社は1909年、鈴木式織機製作所として創

業以来、自動織機、二輪車、四輪車を製造する企業です。時代とともに歩んできた創業以来の多くの製品と現在のクルマづくりの様子を学びました。ランチは舞阪港で新鮮な魚介の天井を堪能し、午後は湖西市に所在するトヨタ自動車創業者の豊田佐吉記念館 (生家跡) を訪ねました。自動織機のデモンストレーションを見学し、トヨタグループの礎となっている豊田佐吉のモノづくりの理念と企業家精神を学びました。

3 日目

午前中、浜松銘菓として有名な「うなぎパイ」を製造する春華堂のうなぎパイファクトリーを訪問し、うなぎパイの製造工程を見学しました。

午後は、本田技研工業 (株) 浜松製作所において、四輪車のトランスミッション生産ラインを見学しました。

4 日目

午前中、航空自衛隊浜松基地広報館を訪問し、航空自衛隊の業務内容に関する展示や市民とのコミュニケーションのあり方を学びました。参加者の多くが飛行服に着替えコックピットで束の間のパイロット気分を味わいました。午後は浜名湖周辺を散策し、汽水湖特有の自然環境を満喫しました。夜は、浜松餃子パーティーで懇親を深めました。

5 日目

午前中、見学した施設や組織についての感想を3分間スピーチで発表し、浜松地域で明治期に企業活動が活発になった背景や企業家の創業理念、報徳思想の現代的意義についてディスカッションを行いました。ディスカッション終了後、現地解散しました。

5 事後学習

参加者は最終日に議論した内容をより深めたレポートを作成し、事後学習において発表しました。創業者の理念を組織がどのように継承するのか、時代の変化が CSR にどのように影響するのかなどについてディスカッションを行いました。



大日本報徳社にて報徳思想を学ぶ

「環境修学旅行」

担当教員名 藤倉 良

1 コースの概要

日 程	2013年8月20日～23日
場 所	福岡県北九州市
参加人数	10名

2 コースの目的

環境を観光資源としている北九州市の取り組みを学習し、その有効活用方法について市に提言します。

3 事前学習

北九州市の公害対策の歴史及び環境国際協力の現状について学習しました。

4 行程 (内容)

1日目

新日鐵住金八幡製鐵所
環境ミュージアム
エコハウス

2日目

シャボン玉石けん
九州製紙
八幡東田地区スマートコミュニティ実証実験エリア

3日目

TOTO 小倉第一工場 + TOTO 歴史資料館



八幡製鐵所 熱延工程で作られた写真撮影用コイル

北九州エコタウン
エコタウンセンター
自動車リサイクル工場
廃木リサイクル工場
風力発電
響灘ビオトープ

4日目

安川電気

5 事後学習

市に対する提案書作成

6 雑感

北九州市の全面的なご協力の下に実施させて頂きました。同市関係各位に深く御礼申し上げます。



八幡東田地区の燃料電池車用水素ステーション



九州製紙 (牛乳パックから再生したロールペーパー。これを裁断してトイレットペーパーを作る)

「津軽鉄道が結ぶまちづくり」

担当教員名 西城戸 誠

1 コースの概要

日 程	2013年2月21日～24日
場 所	青森県五所川原市、中泊町
参加人数	18名

2 コースの目的

このコースは、赤字が続くローカル路線の中でもファンが多いとされる津軽鉄道とその沿線の様々な地域活動を見学、体験しながら、奥津軽地方の「着地型観光」について考えていきます。着地型観光とは、従来型の発地型観光とは異なり、着地側が受け入れやすい観光を通じて観光地の人々と観光客の間によりコミュニケーションが生まれるような地域密着の観光のことを指します。企業組合・でるそーれの皆さんと一緒に、現実を見据えながら、奥津軽の「着地型観光」のモデルの一つを作り上げていくことが目的です。

3 事前学習

五所川原市の観光に関する文献の他、『観光と環境の社会学』（新曜社、2003年）、『体験交流型ツーリズムの手法』（学芸出版社、2008年）などを購読しました。

4 行程（内容）

1日目

五所川原市に到着後、駅周辺の街歩きをしました。「立佞武多の館」で五所川原の夏の風物詩・立佞武多を見学、紙貼り体験の後、アートと地域社会に関する講義を、立佞武多師（斉藤さん）、津軽金山焼（中鉢さん）、津軽塗（野崎さん）の若手職人の方から伺いました。夕食は、コミュニティ・カフェ・でるそーれの「うちごはん」をいただき、スコップ三味線のパフォーマンスも楽しみました。

2日目

津軽鉄道の冬の風物詩であるストーブ列車に乗車し、



津軽鉄道のストーブ列車に乗車

金木駅で下車、太宰治記念館（斜陽館）と新座敷を訪問し、太宰治に関わる観光資源を見学、その比較検討を行いました。その後、五所川原農林高校を訪問し、五農高校の取り組みや、津軽鉄道株式会社社長を交えた公開講座「津軽鉄道が結ぶまちづくり」に参加し、地域住民の活動とまちづくりに関する理解を深めました。夕食後、つがる市フィルムコミッションの川島さんから、映画を通して地域づくりの話伺いました。

3日目

津軽半島最北の漁港・小泊漁協に向かいました。小泊漁協婦人部の方からのしいかづくりを教わり、また、昼食として「漁師めし」をいただきました。午後は、これまでの見学、体験を踏まえて、着地型観光のルートとそのコンセプトを作るグループ別の作業を行いました。地元でグリーンツーリズムや伝統料理教室を行っている「かけはしの会」による夕食の後、地元の方の前で各班が着地型観光についての発表会を開き、地元の方から講評をいただきました。

4日目

最終日は、冬のアスパラ収穫体験を行いました。ここではアスパラの栽培の加温のために、薪の暖房と学校給食の廃油を用いており、環境教育の場にもなっています。自ら収穫したアスパラのホイル焼きをいただき、五所川原に戻り、最後のまとめをしました。

5 事後学習

事後学習は、写真を見ながら奥津軽の着地型観光や、フィールドスタディのコンセプトについての話し合いの後、つがる市フィルムコミッション作成の映画『けの汁』を鑑賞し、「自分にとってのふるさととは何か」「地域との関わりはどうすべきか」などを考える時間になりました。

6 雑感

津軽の皆さんからの以下のメッセージをお伝えします。

机の上だけじゃ学ぶことのできない
ここでなければ巡りあうことができない
そんな時間と出会いが“ここには”ある



フィールドスタディでの「出会い」

「国際平和の追求—国際法の現場を知る—」

担当教員名 岡松 暁子／武貞 稔彦

1 コースの概要

日 程	2013年3月11日～18日
場 所	オランダ、ドイツ
参加人数	22名

2 コースの目的

国際法が実際に使われている現場（国際裁判所、化学兵器禁止機関）を訪れ、国際社会の秩序がどのように維持されているのかを体感します。また、国際法により保護されているリュウベック旧市街地（世界遺産）を訪れ見識を深め、さらに、アンネ・フランクの隠れ家やノイエンガム強制収容所を見学し、ナチスによるユダヤ人迫害について学びます。

3 事前学習

渡航前に行った5回の事前学習では「国際社会」の捉え方に関する講義やグループでの調査学習、その成果発表を実施しました。「国際社会と国際法」、「オランダの歴史と美術」、「ドイツの歴史と現在のユダヤ問題」、「化学兵器禁止機関（OPCW）」、「国連海洋法条約の歴史と国連海洋法裁判所」、「世界遺産」の6つのグループが報告書をそれぞれ作成、しおりの一部に含め現地にも携行することで、さまざまな背景情報などを共有し、現地での学習に活かすことができました。

4 行程（内容）

1日目

成田を午前に出発。アムステルダムへ夕刻に到着しました。

2日目

アンネ・フランクの隠れ家を見学し当時の人々の苦難に想いを馳せた後、アムステルダム市内観光、国立美術館を訪問しました。夕刻にはハーグに宿泊地を移しました。

3日目

国際刑事裁判所（ICC）を訪問、職員の方のお話を伺いました。当初予定されていた裁判の傍聴は公判が非公開となったため実現できませんでした。午後は国際司法裁判所（ICJ）を訪問、小和田恒判事のご講演に一

同熱心に耳を傾けました。

4日目

雪の中、美しい町並みのデルフトを散策、国際法の父と呼ばれるグロティウスの像を訪れました。午後は化学兵器禁止機関で平和維持の難しさについての講演を拝聴し、その後日本大使館で活躍される外交官の方々のお話を伺いました。

5日目

空路ドイツのハンブルクに移動、国際海洋法裁判所で柳井俊二裁判長の大変興味深い講演をうかがいました。午後は市内観光で由緒ある教会を訪れ、夜は希望者がオペラ鑑賞に参加し、現地の人々が守り続けてきた文化を体験しました。

6日目

午前は歴史ある市庁舎を見学、世界遺産のリュウベック旧市街地を訪問しました。午後はノイエンガム強制収容所を訪れ、歴史の現場に立つことで改めて現代の平和の意味を確認しました。

7日目

ハンブルクからアムステルダム経由で日本へ出発しました。

8日目

朝10時頃に成田空港に無事到着、事後報告書等についての打ち合わせ実施後に空港で解散しました。

5 事後学習

2回の事後学習では、現地訪問中に毎日一人7枚ずつ作成した記録カード（全部で1000枚近く）をシェアしつつ、今回の学びの内容や体験について振り返りを行いました。国際社会で活躍する日本人の姿に刺激を受け、英語ができない自分たちががっかりし、世界というものの広さ・違いを実感すると同時に、何よりも平和の価値とそれを維持するために必要な努力の重さや尊さについての気づきがあったようでした。また、今回の体験が自身の今後の大学生活や学び、人生にどんなモノを残したのかについてグループ毎に発表を行い、今後の学びや生活に向けて気持ちを新たにしました。

最後に個人ごとの参加報告を含めこれまでの成果をおさめた事後報告書を、参加学生が自ら編纂しすべての学習を終えました。

「オーストラリアン・フィールド・スタディ (AFS): 英語と自然環境保護を学ぶ」

担当教員名 長峰 登記夫/ストックウェル エスター/板橋 美也

1 コースの概要

日 程	2013年3月2日~17日
場 所	オーストラリアのクイーンズランド州
参加人数	20名

2 コースの目的

以下の三つの大きな研修目的に分けることができます。

- ① ボンド大学付属語学学校で英語を習うこと
- ② 世界的に珍しいオーストラリアの自然を学ぶこと
- ③ オーストラリアの文化を学ぶこと

3 事前学習

AFS の効果を高めるため、AFS の出発前に事前授業を6回行いました。内容としては、クイーンズランド州の自然環境と自然保護について、オーストラリアの文化について、異文化コミュニケーション方法について、そして、英語の基本表現力などについて学びました。

4 行程 (内容)

① 語学研修

英語の授業は、クイーンズランド州のゴールドコースト市に位置しているボンド大学キャンパス内にある大学付属語学学校 (Bond University English Language Institution (BUELI)) で行われました。BUELI 授業の開始初日に、Placement Test (英語力の判断をするためのテスト) が実施されました。このテストのスコアに基づき授業を受けるクラスレベルが指定されました。これは、「生徒の現在の能力にあうレベルで英語を学ぶことがその習得に役立つ」という考えからです。授業のプログラムは、学習の基礎となる項目である「聴く、話す、読む、書く」の能力向上を目指して総合的に進められました。

② オーストラリアの自然環境研修

・タンガルーマ、モートンアイランド (モートン島)

タンガルーマ、モートンアイランド (モートン島) は、世界で三番目に大きい砂の島です。モートン島は様々な自然環境で、素晴らしいビーチや砂丘を始め、湖、小川、岬等の地形、スゲ、ペーパーバッグスワンプ、

バンクシア、マングローブなどの植物の育成地にもなっています。また様々な野鳥も生息しており、ジュゴン、イルカ、クジラ、海亀、エイなど多数の海洋生物が生息しています。モートン島の殆どの場所は国立公園に指定されており、厳しい取り決めにより自然を保護しています。参加する学生は1泊2日の日程で、特に元気な野生のイルカ達に直接餌を与える貴重な体験を含む、島にある様々な自然環境を体験し、その保護などを学びました。そして、島の自給自足についても学びました。

・レミントン国立公園

AFS では、ゴンドワナ雨林保護区の一つのレミントン国立公園も訪問し、自然環境研修を行いました。レミントン国立公園には、亜熱帯、乾燥、温帯、寒帯の気候に属する植物が生息していて、太古の自然を思わせる景観が広がっています。亜熱帯地域のナンヨウスギ、寒帯地域にのみ見られるナンキョクブナ、また最古のシダ植物などの170種以上の希少な植物の他、クサビオヒメインコやアルパートココドリなどの絶滅危惧種を含む270種の鳥類、フクロギツネやパルマワラビー、ヒメウオンバットなどの珍しい動物を見ることが出来ます。本フィールドスタディでは、この貴重な自然をオーストラリアの政府がどのように保護するか、どのように eco-tourism に連結するかなどを学びました。③ 2週間の本フィールドスタディ中は、各学生が、日本人学生の受け入れ経験のあるオーストラリア人の家庭で過ごしました。オーストラリア人の実際の生活を通じて、オーストラリアの文化を学ぶことも貴重な経験となりました。



2週間の英語授業の修了証明書が授与された後

5 事後学習

AFSに参加した学生には2つの課題が出されました。一つはフィールドスタディ全体についてのポートフォリオを作成することです。もう一つはオーストラリアの自然環境研修についてのグループ・プレゼンテーションになり、この課題の発表会がありました。



タンガルーマ島での砂トボガンの経験の後



タンガルーマ島の野生のイルカ達に直接餌を与える



Lamington 国立公園に生息している野生生物についての講義



タンガルーマ島の海洋動物とその保護について海洋動物学の博士の授業



Lamington 国立公園に生息している野生生物を観察

学生の声

AFS（オーストラリアフィールドスタディ）に参加して

語学留学したい人、異文化コミュニケーションを体験したい人、海外の環境保護政策に興味がある人にオススメなのがこのオーストラリアのFSです。二週間という限られた時間の中で、このプログラムは自分のやる気さえあればどんなことでも可能にしてくれます。FSをきっかけに、長期留学やワーキングホリデーに挑戦する学生もいます。また、法政大学から奨学金が支給されるため費用を心配する必要はありません!! *Regret doing something more than not doing it!!*



3年（2年次に参加）鈴木 翔

「開発途上国の人々の暮らしと国際協力の現場を五感で知る —内戦の遺産と現代カンボジア社会—」

担当教員名 武貞 稔彦／安岡 宏和

1 コースの概要

日 程	2013年8月25日～9月1日
場 所	カンボジア王国 (プノンペン、シエムリアップ)
参加人数	24名

2 コースの目的

本コースの目的は、経済協力や援助の対象となっている開発途上国とよばれる国や地域の暮らしと人々について、五感を使って知ることです。今年度は典型的な途上国として想起されること多いカンボジアを訪問し、現地の現実とイメージの異同について考えます。とりわけ、内戦の遺産である多数の「地雷」が人々の生活を未だに脅かしている現状と、いわゆる「貧困」や「幸福」との関係について、異国人である日本人が理解／想像できる範囲という限界も意識しつつ考えることを目的とします。

3 事前学習

5月から8月にかけて6回の事前学習を実施しました。支援・援助、歴史、生活、教育、地雷、カンボジア人の想いという6つのグループに分かれ、それぞれカンボジアの歴史と現状や訪問先での学びに必要な情報を整理、共有するべく努めました。また日本とは環境が大きく異なる途上国に訪問するために、現地での滞在中に健康上注意すべきことなども確認しました。

4 行程（内容）

1日目

朝の飛行機で成田空港出発後、ホーチミン経由で夕刻にプノンペンに到着しました。

2日目

午前中は地雷除去を担当するカンボジア政府機関カンボジア地雷活動センター（CMAC）を訪問し、内戦の負の遺産である地雷についてのレクチャーを受け、実物の見学を行いました。午後は、ツールスレン虐殺博物館を見学、その後、日本政府の支援で作られたカンボジア日本人材開発センターをたずね、日本語を学

ぶ現地の人たちと交流会を催しました。

3日目

午前中は国際協力機構（JICA）を通じて日本政府が支援した浄水場を見学、午後には JICA カンボジア事務所を訪問し、駐在する職員の方の講義を受けました。その後、NPO 団体の日本地雷処理を支援する会（JMAS）から地雷除去活動に日本の民間団体が果たす役割についてお話を伺いました。

4日目

プノンペン市内の王宮と寺院を視察後、キリングフィールドと呼ばれるポルポト時代の史跡を見学、その後陸路シエムリアップに移動しました。

5日目

午前中は CMAC が実際に地雷除去活動を行っている現場を視察、地雷の爆破処理に立ち会いました。午後は、日本人教員が活躍するワットポー小学校を訪問し、先生や児童と交流を持ちました。

6日目

この日は終日アンコールの遺跡群をめぐり、歴史ある世界遺産を見学しました。

7日目

午前中は日本人女性が現地で起業したクルクメール工房というハーブ等を扱う工房を訪問、レクチャーを受けたのち現地従業員にインタビューを実施しました。その後は自由時間とし、夕刻ホテルをチェックアウト、ホーチミンに向け空路出発しました。

8日目

ホーチミン経由成田空港に帰着し、空港にて解散しました。



カンボジア地雷活動センター（CMAC）博物館を見学

5 事後学習

事後学習は当初から予定されていた公開の事後報告会に向けた準備に主にあてられました。現地滞在中に毎日書きためた気づいたことのカード（全部で1000枚を超えました）をシェアしつつ、事前学習で分かれたグループが現地視察を通じて知ったこと感じたことを報告としてまとめる作業を行いました。特に、「地雷」と「幸福」と「貧困」という三つのキーワードをどう結びつけられるのかということを中心にそれぞれ考察を深めました。学部生や外部の方も交えた事後報告会では、構成や発表などすべて学生自身が行い、あらためて現地視察を通じた学びの成果を確認するとともに、今回できなかったことなど今後の自らの学びに活かせる反省点を見いだしていました。



国際協力機構（JICA）を通じて日本政府が支援した浄水場



日本による国際協力の現場を見学しました。



CJCC（カンボジア日本人材開発センター）交流会



事後報告会にてグループごとに成果をプレゼンテーション

学生の声

「カンボジア FS に参加して」



1年 今枝 沙織

このFSに参加した理由は幸せとは何かを探すためです。カンボジアに行って文献では伝わらない世界に、めんくらいました。

中でもトンレサップ湖で水上生活している家族が、ハンモックに揺られて昼寝をしていた姿を見て、これが今まで私が負い目を感じてきた途上国の人たちの姿かと思うと、なんだか拍子抜けしてしまいました。と同時に、遠く離れた人々の幸せについて考えた事はあっても、身近な家族の事を考えたことなんてこれっぽっちもない事に気が付きました。これを機会に少し、自分の行動のとり方が変わりました。今までよりも家族や近くにいる人、地域、日本について興味を持ち大切にするようになりました。

「開発途上国における生物多様性保全の現場にふれる」

担当教員名 高田 雅之／武貞 稔彦

1 コースの概要

日 程	2013年8月11日～18日
場 所	南インド
参加人数	24人

2 コースの目的

南インド西部は世界的な生物多様性の重要地域（ホットスポット）のひとつです。そこで国立公園や自然保護区を訪ね、①生き物の観察を通して豊かな自然環境を理解する力を養う、②観光や森林利用といった開発途上国における人間と自然の関係について考える、③インドゾウを取り巻く環境と文化について理解を深める、ことを目的とし、途上国の視点に立って生物多様性保全のあり方を考える機会としました。さらに歴史・都市・暮らしなど様々な切り口でインドそのものを体感し、自然と社会の両面から、途上国に対する豊かな感性を養うことも大切な狙いのひとつとしました。

3 事前学習

目的を達成するため、「国立公園」「自然観」「生態系・インドゾウ」「文化」「観光・経済」という5つのテーマを設定しました。各自の関心に応じてグループ編成を行い、重なる内容は互いに役割を分担しながら学習を進めました。そしてその成果を発表し合うことで、情報や課題を共有して現地に臨むことができたと思います。また野生生物を観察する実地トレーニングとして東京港野鳥公園に出かけ、双眼鏡の使い方や動物観察のコツについて実習しました。最後に旅行の準備や注意事項を確認し、6回にわたる事前学習を終えました。



ランガンチットゥ鳥類保護区でワニを発見

4 行程（内容）

1日目

成田空港をお昼に出発し、デリー経由でバンガロールに到着したのは深夜近くでした。その日はバンガロールのホテルで移動の疲れを取り翌日以降に備えました。

2日目

バンガロール近郊のパナルゲッタ国立公園を訪問し、サファリバスに乗って野生動物を観察しました。この公園は希少動物を区画毎に管理しており、大型の猛獣などを間近で観察することができました。その後寺院やショッピング施設など、ガーデンシティ・バンガロールの素顔を見物しました。

3日目

バンガロールから西へ、ランガンチットゥ鳥類保護区をたずね、水辺林に群れる水鳥やオオコウモリ、ワニなどを観察、次いで世界遺産西ガッツ山地の麓に広がるバンディプール国立公園を訪れました。夕方のサファリではバスからインドゾウ、インドクジャクをはじめとする多くの野生動物に出会うことができました。

4日目

朝食後、2回目のサファリを行ったのち、ドレスデン・リサーチ財団のスカント氏から、動物保護のため保護区内に住むクルバ部族の人々を移住させた取り組みについて説明を受けました。続いて移住した人々の村を訪ね、暮らしや教育の現場を視察しました。夕方はムドゥマライ動物保護区に足を伸ばして3回目のサファリを体験、親子のゾウを間近で観察することができたのが大きな収穫でした。

5日目

朝ホテルで行われた独立記念日のセレモニーに参加したのち、バンディプール国立公園を離れマイソールに向かいました。裸足で宮殿を見学したのち、マハラジャの親族が営む幼稚園にて南インドの家庭料理を食



バンディプール国立公園で野生動物観察

べました。市内のデヴァラジ市場を訪れたのち、マイソールを一望する丘から夕景とライトアップされた宮殿を堪能しました。

6日目

マイソールから日帰り、ドオバレ・エレファントキャンプに行き、インドゾウと触れ合うことを通してゾウを取り巻くインドの文化を肌で感じる機会を持ちました。その後ツアーガイドの方の取り計らいで一般の家庭を訪ね、お祈りに参加し、村内と農地をしばし散策しました。

7日目

マイソールからバンディプール空港へ向かい帰途につきます。午後の便でデリーを経由し成田に向かいました。

8日目

朝全員無事に成田空港に到着後、解散しました。

5 事後学習

現場を訪れて自分自身の目・耳・肌で直接学び、感じ取った成果を、各自の事前学習テーマに沿ってまとめる作業を行い、その成果を公開報告会で発表しました。報告会の段取りを、カンボジア FS のメンバーとも連携して全て自分たちの手で進めたことも重要な成果といえます。報告会ではムービーで行程を紹介し、インドの概要、5つの学習テーマ、全体まとめについて発表ののち、2人のツアーガイドのメッセージで締めくくりました。次いで報告書の作成です。各人による旅の意義と成果をまとめた個人レポート、5つのグループごとの成果報告、インドと訪問した自然公園等の紹介、観察できた野生動物の図鑑、報告会のアンケートなどを、皆で作業分担して、こちらも自分たちの手で取りまとめました。

南インドを訪ね、限られた時間ですが自然、町、暮らし、文化、人間を強烈に感じとる濃密な時間を過ごすことができたと思います。途上国の生物多様性を主題とした学習でしたが、その国の人間や社会・文化と決して切り離せないものであり、アジアや世界の視野からこの主題に挑む上で、価値観の違いをどう乗り越

えて協力していくかを深く考究する、この上ない機会になったものと考えます。



クルバ部族の村の小学生たちと



マハラジャ親族の幼稚園にて南インドの家庭料理を体験



ドオバレ・エレファントキャンプにて

学生の声

行ってみないと分からないインドの魅力



2年 大なぎ 見咲

わたしたちはインド FS 1 年目ということもあり、手探り状態で関心のある分野に分かれグループを作り、事前学習をしました。実際に現地に行ってみると、事前学習とは異なることへの驚きや感心、感動がありました。FS の内容自体はサファリや自然公園で、の動植物の観察が多かったのですが、市内観光や観光地見学などもとても勉強になりました。帰国後は各自のレポートと事後学習の発表があり、フィードバックする良い機会にもなりました。インドの面白い例を挙げるとすれば、クラクションの音がおかしかったり、停電は日常茶飯事だったり、物乞いがいたりしました。このような経験はインドならではの体験でした。歴史、文化、宗教、自然、経済発展など、他にもインドを表すにふさわしい言葉はいくつもあり、インドという国は一言では言い表せない、不思議で魅力的な国だと思います。インドに関心がある方は是非行ってその感覚を確かめてきてください！

法政大学

人間環境学部

〒102-8160 東京都千代田区富士見2-17-1
TEL.03-3264-9327
<http://www.hosei.ac.jp/ningenkankyo/>

法政大学 人間環境学部

検索



グリーン・ユニバーシティをめざして

法政大学では1999年3月人間環境学部の創設と同時に「環境憲章」を制定し、持続可能な社会の実現をめざす「グリーン・ユニバーシティ」宣言をしました。1999年9月に総合大学としては日本で初めてとなる“ISO14001”（環境マネジメントシステムの国際規格）の認証を取得し、大学の環境改善活動を開始し、環境教育の推進、ゴミの削減・省資源・省エネルギーを継続して実行しています。

人間環境学部ではこの環境マネジメントシステムについて学ぶ講義も設けています。

